

「移民」認めぬまま進む現実

分断世界

DIVIDED WORLD

1面から続く

ピンク色のゴムボールを手に、フィリピン出身の女性が明るく声をかける。「ほらタナカさん、いっよ。おー、すこーい」

東京都江戸川区の特別養護老人ホーム「アゼリー江戸川」では約10年前から外国人スタッフを雇用する。アゼリーグループの来栖宏二理事長は言う。「現実的な戦力として活躍している。今後は業界全体でも、その力を借りなければ現場が回っていかないだろう」日本に働く外国人は10



子の受け入れ 悩む学校

0万人を超えた。移民は「通常の居住地以外の国に1年以上居住する人」とされる。安倍晋三首相は昨年、「いわゆる移民政策を取ることが全く考えておりません」と参院で明言した。

学習支援に取り組む「YS Cグローバル・スクール」(東京都福生市)。夕暮れ迫るビルの一室で、ラビナ・ダンゴルさん(16)が日本語と格闘していた。「ニンジン、ナス、レタス、つまり？」

子が将来も日本で生きていく前提で暮らしているのに、学校現場は人材もノウハウも足りない」と話す。ラビナさんは作文を書いた。「私はせんせいたちのおかげでがんばるきもちがいっぱいです」。保育士になるのが夢だ。

外国人児童の教育に詳しい佐藤郡衛・目白大学長は「彼らが『日本人になる』かは別として、社会の一員として人生を選択できる環境を作れるか。日本人を再定義する必要がある」という。

現実を「見て見ぬ振り」することのひずみは、日本社会に積み重なる。その現実を直面しているのが、学校現場だ。文科省の調査によると、公立学校に通う外国籍の子は約8万人。うち日本語指導が必要な子は3万4千人と10年前の1.5倍だ。

ネパールから2014年秋に来日。翌春、東京都昭島市立多摩辺中の1年に編入した。授業についていくのは難しく、放課後にスクールの通って支援を受けてきた。多摩辺中の喜多野雅司校長は「教育環境には限界があり、受け入れる側も大変。埋めてきたのは先生たちの気持ちです」と語る。

日本社会を支える外国人たちもいずれば老いる。在日フィリピン人介護労働者協会の代表であるケリ・イ

外国人の存在を見えにくくすることで、当面は感情的反発や排外主義がもたらす「分断」を回避できるかもしれない。しかし現実だけが先に大きく進んだ時、何が起きるのか。(仲村和代、編集委員眞鍋弘樹)

特別養護老人ホームで高齢者とボール遊びをするフィリピン出身の菊入ノルマさん(右) 6月23日、東京都江戸川区、角野貴之撮影



スーパーマーケット「レメディオ」の中で、娘がサボテンを切る様子を笑顔で見るファン・アンドラデさん(左) 3月2日、米カンザス州ガーデンシティ、中井大助撮影

米の街「必要だから歓迎」

なお残る偏見 手探り続く

米カンザス州ガーデンシティ。中心部のスーパーマーケットでは常にスペイン語が飛び交う。まるで中南米の街のようだ。ファン・アンドラデさん(62)が35年前に開店し、次々と店舗を拡大した。草原に囲まれた街は現在、約3万人の住民のうち半分近くがヒスパニック系だ。

移民国家の米国では、移住者受け入れは「国是」。1965年の移民法改正を機に、世界中から移民が集まるようになり、今も毎年100万人前後が永住権を得る。だが移民受け入れと同時に差別や摩擦が生じるのもこの国のならい。昨年の大統領選ではメキシコ移民を「犯罪者」と呼び、国境への壁建設を約束したことが、トランプ氏当選の原動力となった。

そんな中、この街は「移民歓迎」を前面に出す。「私たちの生活を維持するために移民が必要なので」と市幹部のマット・アレン氏。市郊外にある全米最大級の食肉処理工場は、地域経済に不可欠だ。「重労働のため、米国人労働者が続ける人は少ない」

ただそんな街でも差別と無縁ではない。昨年10月、ソマリア人が多く暮らすアパートなどに爆弾をかける計画を立てた疑いで、同州に住む3人の白人の男が連邦捜査局(FBI)に逮捕されたのだ。3人はイスラム教徒を「ゴキブリ」と呼び、虐殺によって「社会を自覚させる」ことを目標にしていた。フェイスブックには、「不法移民」に反発し、「雇用が奪われている」という趣旨の書き込みもしていたとされる。

アジアやアフリカからの移民も多い。父親が食肉工場で働くソマリア出身のアドン・イスマイルさん(16)は将来の夢がある。「僕は経済を勉強してビジネスマンになりたい」。米国に着いて数カ月だが、高校に通い、自

市議のジャネット・ドル氏(58)は容疑者の1人の家族と知り合っていた。「私が会った移民たちは、より良い生活を求め、社会にも貢献している。容疑者たちの憎しみはどこから生まれたのだらう」と悩む。移民の暮らしを知らない人らの偏見にどう向き合うか。移民先進国の米国でも手探りの状態だ。(ガーデンシティ、中井大助)

移動の仮免許も取得した。移民らの支援をする修道女のジャニス・トミーさん(71)は「70年代に食肉処理工場の建設が議論された際、拒んでゴーストタウンとなるか、誘致して様々な人を受け入れるかの選択肢を迫られ、『様々な人たち』を恩恵としてとらえた」と振り返る。

自動車も取得した。移民らの支援をする修道女のジャニス・トミーさん(71)は「70年代に食肉処理工場の建設が議論された際、拒んでゴーストタウンとなるか、誘致して様々な人を受け入れるかの選択肢を迫られ、『様々な人たち』を恩恵としてとらえた」と振り返る。